

武蔵野市第四期基本構想・長期計画テーマ別市民会議

「団塊世代の主張」 第3回会議 会議要録

日 時：平成16年2月26日（木） 午後7時～9時

場 所：武蔵野スイングホール スカイルーム1・2

出席委員：7名

1 開会 資料確認

事務局から各委員に、第2回会議の会議要録について確認をお願いする。

2 意見交換

委員：前回の「健康」と「コミュニティ」に引き続き、今日は残り4つについてまとめていきたい。その後、各委員に報告書を分担して書いていただきたいと考えている。報告書の材料ともなるのでこれからの論議に積極的な参加をお願いしたい。まずは「生きがい」から。「どのように生きていくか」「団塊世代が生き生きしていないといけない」などの「世代」についてのキーワードや、「夢のある老後」などの「個」としてのキーワードがある。「リタイアすると人間関係を失う 新たな人間関係」というものや、「人生に定年はない」というものもある。「所属」「役割」「人間関係」、これらはコミュニティにつながるところがある。「趣味」に関連するもの、「ゆとり」に関連するものも出てきた。これらはいずれも「新たなボランティア」の方向につながっていきそうだ。「介護ヘルパー付き介護旅行」これは現行の介護保険ではまかなわれていないが、今後注目されるかもしれない。「3～5年後、団塊世代は地域にどう受け入れられるか」、これは需給バランスにつながっていて、「サービスの担い手かつ受け手」といったキーワードに関係しそうだ。

委員：介護旅行について少し補足。今の高齢者は何かと行動が制限される。生活が狭まり、何のために生きているのかわからなくなるくらいだ。例として、初恋の人と思いの場所に行くという具体的な目標があれば、それを実現しようとする気持ちが生きがいとなる。現在はともするとリハビリのためのリハビリになってしまうが、目的（夢）を達成するためのリハビリは効果的である。団塊世代はまだ元気だから、障害を持ったり年老いたりしたときの不自由さが分らない。

委員：「ゆとり」。そういえば今日の新聞だったか、アメリカの高齢者には「老後の楽しみ」があるのに日本ではそうではない、そういう記事があった。これは経済的なものと、「ゆとり」についての質の違いから来るものだったか。

委員：アメリカの高齢者は株を持っていたりする。

委員：今高齢者を見ると、「タンス預金」をしている人が多いと思う。戦中戦後すぐの頃の人はお金を遣わないのか。

委員：私の義母もお金の遣い方を知らないのか、ぜんぜん遣わない。私は、自分がそういう風になってしまうと今ひとつよくないように思う。その時代の人の子供により多くのお金を残そうとしているような気がする。遣い方の問題と、気持ちの問題。

委員：団塊世代はそうでもないようだ。

委員：しかし団塊世代も年をとると気持ちが親の世代のように変わってくるかもしれない。我々団塊世代は子供達に大きな負担を残そうとしている。社会保険のこと、国債残高を多く残している国家財政のこと、これらが「借金」として後の世代に残されるとするならば、せめて自分の子供には多く残し

たいという気にもなってくる。自分は「子孫のために美田を残さず」の言葉のような、自助努力を心がけていた。親は自分に財産を残すことはなかった。これはよいことだと思ったが、国に頼りなさを感じると、最低限の保証として子供に残そうとするのもやむを得ないと思う。

委員：私の親は今もまあまあ健在で、日々の生活は年金で何とかかなり、蓄えを取り崩すほどには至っていない。しかし、私の場合は公的年金では足りない。だからあらかじめ蓄えを作るなどの自助努力をしっかりとっていくことになるだろう。だが、子供の世代ということになると、あまりにも厳しい。せめて最低限残せるものを残そうと思う。

委員：今は、我々団塊世代が後の世代に負債を残そうとしている。これについて、できる限りは何とかしたいが……。

委員：今ならまだ間に合うかもしれない。できることはしたい。

座長：他の委員はどうか。

委員：私は特に子供に資産を「残そう」と意識することはない。残ればそれでよい。これからの自分の人生は子供より短いわけで、各々しっかり生きていければよいのではないが。

委員：私も今のところ子供に資産を残すことを意識はしていない。私の親もまあ貯金があったかと思うが、ほとんど遣わない。私はあまりそれをあてにしていない。これからは私と妻とで豊かに過ごせたらよいと思い、子どもに資産を残すことは、今のところそれほど意識していない。

委員：これからの世代は、公的年金についても、負担と給付の割合は常に厳しい方向に変わっているようだ。会社も、昔のように「入れたらそれで安心」とはいえなくなってきた。リストラもある。自分の楽しみだけを考えてはいられないと思う。

委員：年金制度にもまだまだ問題が多い。団塊世代も元気なうちにおかしいものには「おかしい」と声を挙げるべきだ。

委員：「社会のシステムの問題」として、今取り組んでいる課題の中で一つのくくりになるだろうか。

委員：定年後は、働いていて忙しいという言葉は通らなくなるので、政治とか、いろいろ参加する必要があるだろう。この会議は、もともと「我々の世代が60歳になった以降、どういう生きがいを持つか」がテーマのはず。今、70歳の人が何を望んでいるかがヒントになる。その中には、60代を過ぎた我々団塊世代の介護に同じ団塊世代が取り組むということもある。これを含め、何ができるか、考えたらどうだろうか。「生きがい」と「仕事」は結構重なる部分もあり、これが一番大事なテーマのはずだ。

委員：それでは続いて「仕事」について議論したい。

委員：こうしてみると、「健康」があって、「生きがい」へとつながっていくように思える。

委員：私を感じるころでは「生きがい」には、個人的な意味での「生きがい」と、仕事のように社会的に役立つという意味での「生きがい」と大きく2つありそう。私の場合は、人の役に立つ方により強い「生きがい」を感じる。ボランティアとか、人に喜ばれることに自分の存在感を感じる。

委員：幸福感（自己完結型）とは違う満足感（他人に役立つ）ということだろうか。

委員：「ノスタル爺さん号」。特殊なトイレ付きのバスのことだが、これがあれば多少外出を困難にする障害をもっていても遠出を可能にする。団塊世代が年をとるときも、全て健常者ばかりではない。これからの施策にはそういった視点も重要だという意味で、ここにキーワードとして挙げた。

委員：私は子供もいないし、特に子供に何かを残そうとは思わない。そのあたりは他の委員の発言とは少し違うかもしれない。今の話の流れから思うのは、「生きがい」も変わっていく、ということ。だ

から、大切なのは好奇心だと思う。60歳になったときに、自分の周りのことに好奇心を持って自然に生きていられるのが理想。その時、自分が好奇心を持てるものが「生きがい」になる。

委員：老後を公的年金のみで、と考えるととても厳しいものになる。ある銀行で「夫婦2人で年金21万円」などと看板が掲げられているのを見かけたが、これは持ち家ならともかくかなり厳しい。年金以外にも、生きがいにつながる仕事と収入があればありがたいと感じる。

委員：私の会社の同僚はあと1年で定年となる。彼は多趣味だが、これを退職後も続けようとする、毎月あと8万円ぐらいの収入があればと思うそうだ。週に数日働いて、少し稼げる、そんな仕事について行政はどれくらいかわれるのか。ハローワークを見たこともあるが、ここにはあまりないようだ。

委員：(60歳になったら)「雇われる」という形態ではない仕事がいい。

委員：これまでに、どこかの市でやっていたパターンではなく、「団塊の世代ならではのアイデア」をすくい上げる仕掛けと、それによる起業だ。他の世代は当てにならないので、「団塊世代の中」でまわしていくしくみを、企業、団塊、市を結びつけて作っていくというアイデアはどうだろう。

委員：「団塊マネー」というのもいいね。

委員：いま、商店街活性化のために、商店街の空き店舗で行政とタイアップしながら店舗を起す、そういうものがある。「仕組み」「うつわ」「行政の提案」「団塊のアイデア」が繋がるとよい。

委員：先に話のあった旅行について、私もいいと思う。同年代が多いほうが旅は楽しい。

委員：介護される人と同じ世代の人が世話をするほうが、若い人が世話をする場合より、例えば食事を作ったりする場合などに介護される人の好みに合ったものが作れたりして、なにかとうまくいったりする。ところで、コミセンについてだが、けやきコミセンではないが、私はコミセンには今ひとつ入りにくいイメージを持っている。入り口が暗い印象だ。例えば入り口にカフェを設置し、そこに団塊世代が関わることで、印象が変わるのではないか。

委員：けやきコミセンの実際の運営方法はどうなっているか。これを応用すれば、他のコミセンの雰囲気も良くなるのではないか。コミセンは身近にあるし、改善はやりやすそうだが。

事務局：コミセンは市が建物を建て、運営は各々の地域のコミュニティ協議会が行っている。

委員：秋ぐらいから、コミセンについて何かしらアイデアを集めて始められないだろうか。

委員：それは面白いが、難しいかもしれない。コミセンについては、地域住民の絶え間ない努力が重ねられてきた歴史もあり、突然に、市が介入するイメージとなってはどうだろうか。

委員：なぜ、けやきコミセンはあのような形態になったのだろう。

委員：住民の意識が高いからではないか。

委員：それではそういった情報が他のコミセンに伝わっていないのだろうか。もしかしたら他のコミセンでもそうしたいと思っているかもしれない。

事務局：最初にできた境南コミセンの設計の際は、限られたスペースにいかに多く部屋を作るかを考えていた時代。その点、けやきコミセンは、「広いロビー」など今の私たちのライフスタイルに近い考え方を採り入れて作ったようだ。境南コミセンを作った頃は、公共施設に「ゆとりある空間」を設けるといった価値観は主流ではなかったのではないか。

委員：運営はボランティアの方が、自分の時間を割いてやっているようだ。予算も年間1千万あるそうだ。予算管理も大変だろう。

委員：市が企業と連携して、どこかのコミセンでカフェを設置することはできないだろうか。これはア

アイデアだが。

委員：ある図書館にはサロン風の場所があって、かなりくつろげるという。旧中央図書館のあった場所、今は工事事務所があるようだが、ああいうところで、例えば、「武蔵野団塊協同組合」のような組織で、そういったようなものが実現できないか。

委員：団塊世代はいろいろな経験をしている人もいる。そういった人が役立つようにできないだろうか。

委員：JRも民営化以降、いろいろ積極的に活動しているようだ。

委員：駅の床面に広告を貼って、収入を得ている。バスも、ラッピングバスが走るようになった。あれも規制緩和をしたからだが、決断さえあれば、できることだ。

委員：「団塊協同組合」というキーワードも出たところで、「仕事」は一応ここまで。結構出たようだ。次は「家族」について。キーワードは他のものに比べて少ないようだが……。「若い者から厳しい目で見られる」「シングルで老後を生きる」など出ている。団塊世代はあまり家族を思わないのだろうか。

委員：夫婦という意識が強くなっているようだ。

委員：親、子、ともに価値観が多様化し、家族の形態も多様化している。昔のように、長男の嫁が必ず親の面倒を見る、などということはなくなった。また、何日か前の新聞に「何人がで共同で住む老人ホーム」のような記事があったような気がする。これからはああいったものがはやっていくように思う。

委員：あれはなんと言うのだろう。

事務局：グループホーム、家族単位だとコーポラティブハウスなどとも言う。

委員：以前、同世代の女性との間で、「友達同士共同で住もう」と言う話が出たりすることがあった。男性だとどうだろう。

委員：私は可能だと思う。

委員：たまたま私の知り合いは医療関係者で、以前沖縄に「医療村」なるものを作ろうかと話題になったことがある。これは夫婦で入るものだが。

委員：私は「シングルで生きる」というキーワードも挙げたが、そういう生き方をする場合でも、周りと仲良くやっていくことは重要だろう。

委員：新宿のほうにあったと思うが、アパートに家族が何家族か住んでいて、アパートの最上階に例えばバレエをできる場所があり、アパート入居者の子どもはバレエをしていた、そんなものが昔あったそうだ。アパート全体が家族というか。これから建てられるものは、意外とああいった過去にあったようなものに戻っていくのかもしれない。桜堤の公団が建て直されていくようだが、あそこにそんなアイデアが活かせないか。

委員：私などは、退職した学者専門の老人ホームができないかと思ったりする。本をたくさん持っているのだが、これの扱いに困っている。学校の図書館もいっぱいでも入らない。

委員：今、介護保険で伸びているのはグループホームだそうだ。企業がどんどん進出していて、チェーン店になっている。ディスカウントを売りにするところも出てきた。値段も安い、食事がレトルトだったりする。そうかと思えば、超高級な老人ホームもあって、とても高いのだが、サービスはとても良いものもあるという。これは意外と儲かるそうで、なぜかと言うと、お金が余っている老人が結構いて、その中でも例えば銀座でよくお買い物をしたい人はあまり遠くへ移り住むことを好まないの、こういった高級ホームを利用する、というのが理由らしい。武蔵野市はターゲットになっている

そうだ。

委員：老人ホームではないが、青梅には高級な病院があるそうだ。私はいくつか老人ホームを見て回ったが、どこのホームにも入りたいとは思わない。というのも、かなりお金を払っても、自分の専有スペースは狭いし、自分の部屋に風呂はないし、火も使えない。これらはいずれも安全のためだとは思いますが、そういうホームに入ったら、空気はきれいかもしれないが、何もすることがない。

委員：そういう人を狙って、先の超高級老人ホームはあるのかもしれない。

委員：ただ、超高級老人ホームに入って幸せかどうか疑問だが。

委員：団塊世代は高級に限らず入れないだろう。

委員：「老人ホーム」として入居者を老人に限定してしまうとうまくいかない。私の知るところに「ハートフルハウス」という、老人だけでなく、若い人も共同で生活をする、というものがある。風呂も、大きなお風呂もあり、個人の風呂もある。食事も、食堂もあり、個人のキッチンもある。これは民間でやっている。老人だけでなく、若い人を混ぜることでうまくいくようだ。

委員：業種別、職業別、あるいは世代を混ぜて。いろんなくくりが考えられる。画一化したものの方がビジネスにはしやすいだろうが、こういったものもまたあってよい。

委員：ひとりでやろうとしてもなかなかできない。協同組合的なやり方で、結構面白く、かつ社会的に貢献できるものになるような気がする。

委員：自分のスペースがある、そういう老人ホームはやり方はどうであれこれから求められていきそうだ。

委員：またハートフルハウスというだけあって、一人一人のコミュニケーションを大事にするところがある。

委員：今までは、例えばボケなど、体が衰えた方向けの管理の強い老人ホームが多いが、これからは元気な人を中心としたホームなども考えられるだろう。ここまで「家族」についていろいろ見てきた。次は「その他」について議論する。「退職後に違和感」「同世代が何を考えているか」などキーワードはいろいろあるようだ。今までやってきた「健康」などに含まれそうなものもある。

委員：最近は、定年まで働くかどうか流動的だったりする。いずれにせよ「退職後に違和感」ということではないと思うが。

委員：文化的なものはどうか。

委員：学生時代より勉強するようになった。ただ、若い頃に勉強するほうが吸収がよいと思う。

委員：今は60でも若い。

委員：タレントで、たけし軍団の、そのまんま東。彼は大学に通っているそうだが、彼は好奇心が旺盛で、学校に通うことが苦にならないのではないかと思う。「たいへん」「つらい」と思っていたら続かない。そうなれば理想的だ。

委員：個人的な趣味であれば、今も団塊世代の多くの方はしていると思う。生涯学習に近いもので、同世代で取り組めるもの。そんなものがあれば.....

委員：今までのものは、何らかのパターンを押し付けられている感がある。

委員：それでは、武蔵野協同組合の中に、新たに大学はどうか。

委員：「団塊大学」というところか。または、我々が学校に出かけて行って空き教室（団塊ルーム）で教えるのも良いのでは。

委員：NHKの番組「ようこそ先輩」だったか、ああいった感じの学校などいいと思う。

委員：あれは、時間、場所を自由に組み合わせていろいろできていて、とてもすばらしい。「この指止まれ」方式だと集まってくれるかもしれない。

委員：私の友達で、最近「人の話を聞こう会」という会を主宰している人がいる。これは、20人ぐらいの異業種の方たちと、月に1回ぐらい集まって、一人ずつ話していくものである。この前はメディチ家の話、その次は法令遵守の話、など全く違う話である。こういった学習する場があるといいかもしれない。市と五大学の共同講座に参加したが、学生と一緒に学べるのも有意義だ。

委員：このように「学ぶ」というテーマで一つづくりができた。「学習」「文化」。

委員：この例になるか分らないが、4年ぐらい前に新宿にゴールデン街という飲み屋街があって、わりとアーティストたちが集うところだった。あるとき「ゴールデン街文化祭」をすることになって、これは自由参加なのだが、一人のアーティストが一つの店に張り付いて、店を盛り立てるというのをいくつかの店でやるのだが、これがテレビ番組で取り上げられて、ちょっと話題になった。

委員：武蔵野市では祭はやっているのだろうか。

委員：先のゴールデン街文化祭のようなコミュニケーションの方法も、また一つのビジネスにつなげられる可能性がある。

委員：それは収益をあげるという面ではどうなのか。

委員：酒造業者に話をもち込むと、角ピンをくれたりした。だが、たいてい会社の予算は年の初めに決まっていて、その時もそうだったが話をもち込んですぐ協賛金を出す、というわけにはいかないようだ。

委員：さて、ひととおり意見も出たところで、そろそろ報告書の作成を考えていきたい。今回の会議要録、「生きがい」など他のキーワードについてまとめたものを新たに用意するので、別に渡す報告書作成案に従って作成していきたいと思う。「健康」「コミュニティ」「生きがい」「仕事」「家族」と、「文化」などとその他にまとめられてきたものを各自分担して書いていきたい。といっても、他のキーワードにかかることを書いてもかまわないと思う。

委員：書く分量はどのくらいか。

委員：一人につき1,000字以上。たたき台としてさらに文章を練っていき、5月頃までに決定予定。

分担を決定。

その他、施設見学について、意見交換。

### 3 その他

報告書作成に必要な資料を、事務局から速やかに委員に提供し、委員はそれをもとに報告書案を作成することを確認。